

平成29年度

文学部夏期特別プログラム

2017年9月9日-23日

東京の部・北海道の部 **報告書**



Report on
2017 Special Summer Program
at the Faculty of Letters

September 9-23, 2017 in Tokyo and Hokkaido

THE UNIVERSITY OF TOKYO

目次

1

巻頭挨拶

- 四回目の新しい夏に
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 佐藤 健二 2
- 平成29年度の夏期特別プログラム報告書に寄せて
セインズベリー日本藝術研究所 考古・文化遺産学センター長
イーストアングリア大学 日本学センター長 サイモン・ケイナー 3

2

サマープログラムの概要 4

3

プログラム実施内容 5

4

受講者レポート

- Summer Program 2017 diary 11
- Thematic Report 17
- Bea Hannay-Young【ケンブリッジ大学】
- Enya Hyde【フリンダース大学】
- Flora Lloyd James【オックスフォード大学】
- Jose Alexandro Salgado-Espinoza【英国UCL大学】
- Stephen West【ニューメキシコ大学】
- 平成29年度夏期特別プログラム日誌 20
- テーマ別レポート 26
- 瀬戸 多加志【文学部 3年】
- 渡邊 春香【文学部 3年】
- 河野 奏人【教養学部 1年】
- 中川 大樹【法学部 4年】
- 八田 紘和【教養学部 2年】

5

総括

- 交流の夏
東京大学大学院人文社会系研究科・副研究科長 佐藤 宏之 29



四回目の新しい夏に

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

佐藤 健二

この特別プログラムも、今回で四回目の新しい夏をむかえる。英国のノリッチに本拠をおくセインズベリー日本芸術研究所の配慮のゆきとどいた連携協力のもとで、この東京大学文学部の交流プログラムに今年も、国内外から熱心な新たな参加者を得て、交流の体験に印象ぶかい記録の一ページが加わったことを喜びたい。

ひとはどのように自分のものとは異なる文化に出会うのか。

ひとはどのように今は見えなくなってしまった歴史に出会うのか。

その道筋は具体的にはじつにさまざまで、偶然に満ちたものであろう。しかし、自分がそれまで慣れ親しんで、あたりまえだと思っていた知識や感覚からは「理解しにくい」ものとして、その自明性の境界に「異文化」や「歴史」が現れるという事実は、たぶん必然的で構造的なものである。奇妙だったり、不可解だったり、おそろしかったり、おもしろかったりする、できごとやモノとして突然に出会うにちがいない。それを異なる「文化」のきれはしとして、あるいは忘れられた「歴史」のかけらとして解読するには、たぶんそれ相応の持続的な探究心と自由な想像力が必要である。もちろん、直観はその最初のとびらを開く力である。

何年前かに、このプログラムの後半で参加者が訪れた常呂の遺跡を、私自身もまた見学したことがある。そのとき、大地を掘り下げてつくった、数家族の共同生活をささえていたであろう、大きな屋根の竪穴式住居の模型をはじめ資料陳列館で見た。これほどに大きな、集合住宅を思わせるような竪穴があることに驚いた。そして自分が中学生の頃に習って想像していた、小さな茅葺きの縄文住居のイメージが、いかに「核家族」の近代の常識に毒されていたかを思った。あらためて考えてみると、穴を掘ってつくった大きな住まいの容れ物がささえていた大家族は、東北地方において近年まで機能していた同族団ともつながっているし、北海道よりも北のサハリンやロシアに国境を越えて広がる、さまざまな名で呼ばれた民族の暮らしにつながるもののようにも思えた。年号も国境も、ひとが設けた仮の区切りにすぎず、そこにとらわれることで見えにくくなるものがある。人間の生活や文化の重なり合いは、現在の国境に視野を限ることなく、世界的な拡がりのなかで、おおげさにいえば人間や事物の地球大の交流のなかで読みとっていかなければならない。

たった何日かの見学の旅でも、つかのまの読書の座学でも、のちの成長を予感させる楽しい思いつきを得ることができる。国境を越えて集った新しい仲間たちのそれぞれが、それぞれの扉を開いた記録の巻頭に小さなあいさつを添えて、このプログラムの実現に力をつくした、すべての関係者に感謝したい。



平成29年度の夏期特別プログラム報告書に寄せて

セインズベリー日本藝術研究所 考古・文化遺産学センター長
イーストアングリア大学 日本学センター長

サイモン・ケイナー

Foreword to the Summer Program 2017

Head, Centre for Archaeology and Heritage Sainsbury Institute
for the Study of Japanese Arts and Cultures Director,
Centre for Japanese Studies University of East Anglia, Norwich, UK

Dr Simon Kaner

It is a great pleasure to introduce the report for the latest Sainsbury Institute – Faculty of Letters, University of Tokyo Summer Program. The Summer and Winter Programs, jointly run by the two institutions, are offering a very valuable introduction to cultural heritage in the two countries, along with expert insights into how cultural heritage is conceptualised and managed in Japan and England. At the same time, the programs provide a unique opportunity for students from the University of Tokyo and universities across Europe and elsewhere to spend a fortnight together, sharing experiences and bonding through a common appreciation of the importance of cultural heritage.

We are doubtless very fortunate in England and Japan that cultural heritage is highly valued, and that secure frameworks are in place to protect, conserve and study that heritage, both tangible and intangible. We cannot take these frameworks for granted. In many parts of the world, cultural heritage is under threat. Despite the best efforts of both local and international agencies and countless dedicated individuals, the impact of war, natural disaster and looting means that each year irreplaceable treasures are lost. Even in the short time that we have been running the Summer and Winter Programs, the ancient city of Palmyra in Syria has been deliberately targeted for destruction, monuments in Nepal were reduced to rubble by earthquake, and antiquities of obscure provenance continue to be traded on the international market.

I am sure that all of the graduates of these programs will find themselves in influential positions in whatever career they pursue. It is our heartfelt hope that the memories they acquire during the programs inspire them to advocate respect for cultural heritage wherever they encounter it. We also hope that they will continue to both make use of and contribute to the network of graduates of the programs of which they are a part.

今回セインズベリー日本藝術研究所・東京大学文学部の夏期特別プログラム報告書を紹介する運びとなり光栄に思います。両機関が協力して実施する夏期・冬期特別プログラムは、日本とイングランドの文化遺産ならびに両国の専門家の文化遺産の理解と管理手法について学ぶ入門プログラムです。各プログラムでは、東京大学および欧州等の大学から参加する学生が二週間にわたって共に移動・生活し、文化遺産の理解を通して結束するというユニークな機会を提供します。

イングランドと日本では、無形、有形に関わらず文化遺産が高く評価されており、それらを保護・研究するための枠組みも長らく存在してきました。しかし、我々はこうした枠組みを当然なものだと考えるべきではないでしょう。今日、世界の多くの国・地域において文化遺産は危機に晒されています。国際機関、国政府、地方政府、個人等々の限らない尽力にも拘らず、戦争や自然災害や略奪などによってかけがえのない遺産が次々に失われています。夏期・冬期特別プログラムを実施した近年でさえ、シリアの古代都市パルミラが意図的に破壊され、ネパールでは地震により様々な史跡が瓦礫と化し、国際市場では古物の違法取引が行われ続けてきました。

プログラムの参加者は、今後どのような進路を選ばれようと影響力のある立場につかれることでしょう。プログラム中に得た経験が糧となり、いかなる文化遺産に対しても敬意を払うことの大切さを世界中に広めていかれることを心から願います。また、参加者同士の人的ネットワークをさらに強化、有効活用されていくことを期待します。

2 サマープログラムの概要

実施期間	● 2017年9月9日(土) – 9月23日(土)
内容	● 前半：本郷キャンパスでのプログラム(9月9日– 9月15日) ▶江戸東京博物館、日光東照宮、日光山輪王寺、インターメディアテク、國學院大学博物館、東京国立博物館、野毛大塚古墳等、歴史系博物館・歴史文化遺産の見学 ▶谷中・根津・千駄木地区での下町文化に関するグループワーク ▶東京国立近代美術館、国立新美術館、森美術館等、美術館の特別展・常設展等の観覧 後半：人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設(北海道北見市常呂町)でのプログラム(9月16日– 9月23日) ▶擦文文化(11世紀頃)の竪穴住居跡 遺跡発掘体験(北見市大島1遺跡) ▶北見市および網走市周辺の遺跡、博物館の見学 ▶勾玉製作体験・土器接合体験等、考古資料の製作・整理実習
担当講師	● 大貫静夫(人文社会系研究科 教授) 松田 陽(人文社会系研究科 准教授) 高岸 輝(人文社会系研究科 准教授) 熊木俊朗(人文社会系研究科 准教授) イローナ バウシュ(人文社会系研究科 特任准教授)
募集方法等	● 2017年4月に人文社会系研究科ならびにセインズベリー日本藝術研究所のwebsite等により告知。選考後、5月中旬に通知。
受講者	● 本学の学部学生5名(前期課程学生2名、後期課程学生3名)、セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生5名
支援者 (プログラムに同行)	● 夏木大吾(人文社会系研究科助教) 國木田 大(人文社会系研究科特任助教) 小山誠司(人文社会系研究科特任専門職員) 萩原 稔(人文社会系研究科事務部財務・研究支援チーム専門職員) 藤田 司(人文社会系研究科事務部教務係長) 藤山佳那(人文社会系研究科事務部総務係) 舟木太郎(人文社会系研究科博士課程大学院学生) ペルシチ・マルコス(人文社会系研究科博士課程大学院学生) 渡邊実希(人文社会系研究科修士課程大学院学生)
協力	● 北見市教育委員会等

東京の部

プログラムの前半では東京に滞在しながら、日本の歴史文化遺産の全体像の把握に努めた。初日のガイダンスでは佐藤健二研究科長が受講者を歓迎し、プログラムの趣旨説明を行った。その後、受講者たちが英語で自己紹介を行い、各人の抱負を語った。二日目以降は、本郷キャンパスでの座学、都内および近郊の博物館・美術館や史跡等への訪問実習を行いながら、日本の歴史文化遺産の多様な側面を学んだ。受講者たちは本郷キャンパス近くのホテルに泊まりながら課題をこなし、日本と海外との壁を超えるかたちで親交を深めた。プログラムの最終日には、各受講者がそれまでの活動をまとめたレポートを作成した。

● 本郷キャンパスでの座学と見学実習

大貫担当講師が日本の先史時代（旧石器、縄文、弥生、古墳時代）の考古学の概要を1時間半ほどかけて説明した。続いて、同担当講師による解説の下、文学部考古列品室にある資料を1時間ほど掛けて丁寧に見て回り、座学で学んだ考古学の知見をモノの理解を通して強化することに努めた。受講者たちは、座学で学んだ考古遺物を、すぐに手にとって体感することができ、講義内容を深めることができた。

また、日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館の協働によるミュージアム「インターメディアテク」のコレクションも見学した。同博物館は、東京大学が1877年の開学以来蓄積してきた学術標本を展示している。受講者は収蔵コレクションとともに、最先端の学術環境にもふれることができた。

● 博物館・美術館での実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であることを意識し、東京滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。訪問した館は、江戸東京博物館、インターメディアテク、國學院大學博物館、東京国立博物館、東京国立近代美術館、国立新美術館、森美術館（訪問順）であり、高岸担当講師、パウシュ担当講師、松田担当講師が分担しながら解説を行った。國學院大學博物館では、同館の内川隆志教授に案内して頂いた。期間限定の大型特別展を見る機会もあり、東京国立近代美術館では「日本の家



開講式（法文2号館でのガイダンス風景）



本郷キャンパスでの座学と見学実習（担当講師による考古学の座学）



博物館・美術館での実習（美術館において特別展を「体験」する参加者）



博物館・美術館での実習（東京国立博物館にて記念撮影）

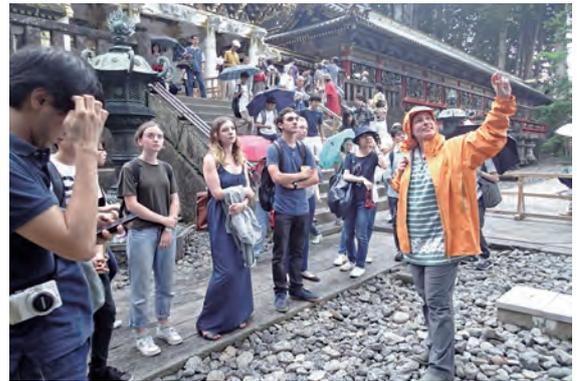
1945年以降の建築と暮らし」展、国立新美術館および森美術館では「サンシャワー：東南アジアの現代美術展 1980年代から現在まで」展を見学した。海外からの受講者にとっては、これらの博物館・美術館での見学実習は日本の歴史文化遺産と歴史全般を学ぶ良い機会ともなった。

● 歴史文化遺産サイト訪問

歴史を学ぶ上では、実際の地理的空間に結びつけながら考察を進めることが重要であるとの認識に基づき、東京滞在中には歴史文化遺産サイトも積極的に訪問した。訪問したのは、浅草、日光、上野公園である（訪問順）。浅草訪問は、浅草寺という今日の東京を代表する歴史文化遺産が、今日どのように社会的に受容され、また使用されているのかを直接体験しながら学ぶ機会となった。半日かけて行った日光訪問では、日光東照宮と日光山輪王寺を見学した。日光東照宮では、修復を終えたばかりの陽明門を見学することができ貴重な機会となった。また、オランダから寄贈された回転灯籠を前にして、パウシュ担当講師が江戸時代の日本とオランダの関係について解説した。上野公園では、松田担当講師が公園内の建築物、彫像や記念碑の説明を通して、日本文化の解説を行った。等々力溪谷と野毛大塚古墳を訪問した際には、東京23区唯一の溪谷を体験し、それから造営時の姿に復元された古墳の墳頂に登って、古墳文化についての理解を深めた。

● 谷中・根津・千駄木でのグループワーク

本プログラムでは、本学部学生とセインズベリー日本芸術研究所の協力により選抜された海外の学生との国際交流も目的となっている。東京大学に近い下町である谷中・根津・千駄木エリアを、受講者たちが中心となってグループワークを行った。本学部学生と国外の学生とを合わせた3グループで、それぞれ訪問する歴史文化遺産などを自由に決め、東京下町の文化について主体的に学んだ。各グループでは、六義園、子規庵、書道博物館、朝倉彫塑館などを訪問し、その歴史文化遺産の歴史や意義について学んだ。都内を代表する日本庭園である六義園では、見事な景観を体感しながら、庭園の文化について理解を深めた。本学の受講者が海外の学生にレクチャーする場面も多くあり、英語で議論する良い機会となった。



歴史文化遺産サイト訪問（日光東照宮陽明門の前で解説を受ける参加者）



歴史文化遺産サイト訪問（野毛大塚古墳にて）



歴史文化遺産サイト訪問（上野公園において担当講師の解説を受ける参加者）



歴史文化遺産サイト訪問（等々力溪谷にて）

常呂の部

プログラムの後半では北海道に移動し、人文社会系研究科の附属施設である常呂実習施設で北海道の歴史遺産と自然遺産について体験的に学んだ。常呂のプログラム中は施設に附属する学生宿舎に宿泊し、自炊もしながら課題に取り組み、受講者同士や参加スタッフ、そして地元北見市常呂町の支援者との交流を深めた。プログラムの最後には各受講者がレポートを提出し、担当講師から修了証の授与がおこなわれた。

● 北海道の先史文化概説（講義）

常呂でのプログラムは、「北海道の歴史遺産と自然遺産について体験を通じて学ぶ」ことを主眼としている。プログラム全体への理解を深めるため、熊木担当講師が北海道の先史文化の概要について講義をおこなった。縄文時代以降、本州とは異なる歩みをみせる北海道の先史文化の特徴について、続縄文文化やオホーツク文化、アイヌ文化の成立過程など、本州やロシア極東との交流関係に注目しながら順を追って紹介した。講義内容には専門的な内容も含まれていたが、丁寧な解説がなされるとともに、受講者からの質問を通じて理解を深めることができた。



とこる埋蔵文化財センターの見学（先史文化概説講義に続けて実施）

● 勾玉の製作体験

縄文時代の勾玉を実際に製作してみる体験を通じて、古代の技術や造形に対する理解を深めた。題材としたのは常呂の遺跡から出土したヒスイ製の勾玉で、実際の製作においては加工しやすい「滑石」を材料として約2時間かけて手作業で削って磨きをかけ、各受講者が1個ずつ勾玉を完成させた。製作作業にあわせて、当時の加工技術や原材料と製品の流通についても紹介した。実際に製作を体験した後に、担当講師から当時の原材料であるヒスイを加工する場合には滑石よりも遙かに労力を必要とすることが説明されると、受講者からは縄文人の技術の高さを実感する感想が伝えられた。



勾玉の製作体験（加工しやすい「滑石」で勾玉を製作する参加者）

● 遺跡出土土器の接合体験

遺跡から出土した土器の破片を接合する作業の体験を通じて、考古学研究の方法について実践的に学んだ。遺跡出土の土器片について1点1点文様を観察して型式毎に分類し、ジグソーパズルを合わせる要領で破片同士の



遺跡出土土器の接合体験（遺跡出土土器の破片の文様を熱心に観察して接合作業に臨む参加者）

接合を試み、土器のかたちを復元する作業をおこなった。教材となる土器片については、北見市教育委員会から実物の続縄文土器を借用した。この作業は根気を必要とする難易度の高いものであったが、熊木担当講師から接合する際に着目すべき点について助言を受けた受講者は、文様を熱心に観察して課題に取り組み、いくつもの土器片を接合することができた。実際の遺物整理ではこの作業を数ヶ月も続けるという説明を受け、受講者は考古学研究や埋蔵文化財保護にかかる労力について実感することができた。

● 実習施設周辺の遺跡見学

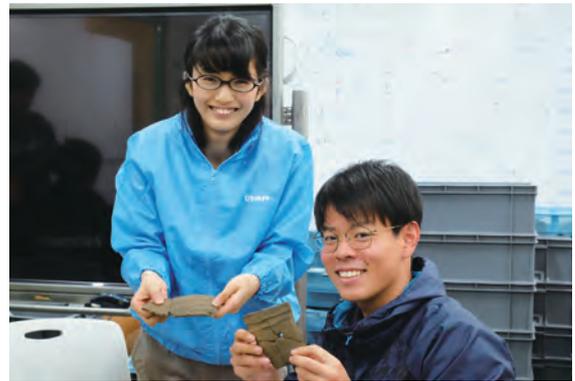
実習施設の周辺には、国指定の史跡「常呂遺跡」を中心として大規模な先史文化の遺跡が数多く存在している。このうち、史跡「常呂遺跡」の各地点（ところ遺跡の森地点、栄浦第二遺跡、トコロチャシ跡遺跡）とトコロ貝塚を見学し、遺跡の保護と活用に対する取り組みを実例で学んだ。トコロ貝塚ではカキなどの貝殻が、トコロチャシ跡遺跡では石器や土器が地表面のあちこちに露出しており、それらに実際に触れることによって歴史遺産の存在を体感することができた。

● 遺跡発掘体験

常呂町内に存在する「大島1遺跡」において遺跡の発掘を体験し、考古学の調査と研究の方法について学んだ。大島1遺跡は擦文文化期とみられる竪穴住居跡が窪みで残る集落遺跡で、発掘はその窪みのうちの1軒を対象として、午前10時頃から昼食をさみ午後3時頃まで実施した。熊木担当講師および夏木助教の指導のもと、受講者は竪穴の埋土や竪穴周囲の表土を丁寧に掘り下げ、続縄文土器や擦文土器、石器などを検出した。発掘調査に初めて参加する受講者も多く、考古学研究を実地で学ぶ貴重な経験となった。

● 世界遺産 知床見学

世界遺産に登録されている知床を訪れ、自然遺産への登録理由となった多様な生態環境とその相互関係、豊かな生産性という特質を実見するとともに、自然の保全と人の利用との両立を目指す保護と管理のあり方についても学んだ。斜里町ウトロまでの行程を含む移動は全て車でいい、斜里町立知床博物館、知床峠、知床五湖、オシンコシンの滝、オンネバツ川孵化場といった主要地点を



ジグソーパズルの要領で土器の接合を試みる参加者



実習施設周辺の遺跡見学（トコロ貝塚で遺跡の保護と活用に対する取り組みを担当講師から実例で解説を受ける参加者）



遺跡発掘体験（「大島1遺跡」において遺跡の発掘体験）



世界遺産 知床見学（知床峠にて記念撮影）

巡回した。受講者は火山、森林、湖沼、断崖などの多様な景観に触れながら、それらの具体的な保護管理の方法を現地で視察した。ウトロからの帰路では突然の悪天候に見舞われ、豪雨や雹の中を車で移動することになったが、それも自然の猛威を体感する得難い経験となった。

● 博物館見学

実習施設の近隣に位置する各博物館、すなわち、ところ遺跡の館、常呂町郷土資料館（以上北見市常呂町内）、北海道立北方民族博物館、網走市郷土博物館、博物館網走監獄、モヨロ貝塚館（以上網走市内）を見学した。これらの館はいずれも地域の特徴ある歴史や文化を紹介した博物館であり、受講者は展示資料を実見しながら、地域の歴史遺産について理解を深めた。

● 異文化コミュニケーションとしての博物館展示(講義)

プログラム全体の総括を兼ねて、松田担当講師が“Presenting dogu in UK museums”と題した講義をおこなった。講義では、縄文文化の土偶を主な題材としてイギリスで開催された二つの特別展、すなわち大英博物館の土偶展“The Power of Dogu”と、セインズベリー 視覚芸術センターの土偶展“unearthed”が紹介され、この二者の比較を通じて、博物館展示に込められた意図とそれを表現する手法、見学者の文化的背景による受け止め方の違い、歴史文化遺産とアイデンティティの関係などについて解説がおこなわれた。受講者は二つの展示の実例を通じて、博物館展示を媒介とした異文化のコミュニケーションや、歴史文化遺産が持つ価値の多様性について学んだ。



博物館見学（モヨロ貝塚館において担当講師から解説を受ける参加者）



異文化コミュニケーションとしての博物館展示（担当講師によるプログラム全体の総括を兼ねた講義）



修了証授与（附属北海文化研究常呂実習施設にて）

東京の部



常呂の部



Summer Program 2017 diary

Bea Hannay-Young, Enya Hyde, Flora Lloyd James, Jose Alexandro Salgado-Espinoza, Stephen West

Tokyo part

● DAY ONE — 9th September

On the first day of the program, all of the students met at the University of Tokyo Hongo campus at 1:30pm. Here we all introduced ourselves and met the teachers that would be joining us on this program. After returning to the hotel and checking in, we all had a chance to rest before heading to Asakusa to visit Senso-ji shrine, where we spent the afternoon exploring the complex. That night we had a Western style dinner that consisted of pasta and pizza, and spent our evening exploring Ueno Park. We visited a temple that was located in the centre of park that was surrounded by a lily pad-covered pond.

● DAY TWO — 10th September

We started the day with Japanese style breakfast in the restaurant underneath the hotel – a very delicious and complete meal in comparison to Western breakfast!

Then we travelled (using our new PASMO) to the Hongo campus of the University of Tokyo. Here, Professor Onuki delivered a lecture on Japanese prehistory, giving us an overview of the different cultures which have developed in Japan from the Palaeolithic to the present day. Archaeological features which make cultural periods distinct (such as pottery types, burial patterns and housing style) were described, with particular focus on the Jomon period. The geography and regional patterns of cultural change were also explained. All in all the lecture allowed us to have a very thorough introductory understanding of Japan's archaeology. After this lecture we were given a tour of the 'public' university collections, which were held behind a locked door. Although the collections were slightly chaotically organised, the tour granted us the opportunity to develop our new archaeological knowledge through looking at artefacts of different cultural periods; the collection held some very nice Jomon pots and Kofun haniwa.

After lunch, which was in a restaurant under a railway line with a sumo wrestling ring in it, we visited the Edo-Tokyo museum. This museum was impressive in scale and expense. There were several reconstructed houses of both Edo and modern periods, and a life-sized replica of part of the Nihonbashi, which was the central bridge of Edo. The museum was very interactive, with stuff to pick up and walk through in order to give a taste of what life in Edo was like. In the evening we had dinner in the same Japanese restaurant which we had had breakfast in, and some of the group took a trip to Shibuya to see the famous crossing and had a good time playing arcade games.

● DAY THREE — 11th September

Today, we ventured on a field trip outside of Tokyo for the first time to a place called Nikko, which is a World Heritage Site located in Tochigi prefecture about 2 hours north of Tokyo. On our way to the train station in Tokyo, we saw the Asahi company building – it had a peculiar statue on top of the building, which we thought it resembled some sort of golden poo!

Once we arrived at Nikko station, we took a shuttle bus to the bottom of the small mountain where the temples and shrines were located. After climbing a few hundred metres, we came upon the temple that houses the deity form of Ieyasu Tokugawa in which people from across Japan come to worship, and foreigners come to gaze at the

glorious architecture and decorative features.

We climbed further up the mountain to find Ieyasu's real burial tomb, which once was a wooden monument, but was reconstructed in bronze in the 19th century. This area was very humble and had minimal religious and decorative items. It was also very hard to climb up to, so this may explain the lesser number of visitors.

For lunch, we ate at a soba/ramen shop, which was cheap and had a small menu, but the food was quite tasty.

We then walked back down past Ieyasu's shrine and visited his grandson, Iemitsu's shrine. It is said that he was not very popular as his grandfather had been, and maybe this explains why it was much smaller. This was also a select place where people can buy a type of amulet in the form of a golden arrow called a hamaya (demon-breaking arrow).

Towards the end of the downwards climb, it started to rain quite heavily, and we thought that the natural scenery was even more impressive.

Before we headed back to the station, we had a coffee break at a local shop along with some biscuits and cakes.

We were initially going to have shaved ice, but the rain stopped us.

Once we got back to our hotel in Tokyo, we decided to all go to the suite room and played card games before and after dinner.

● DAY FOUR — 12th September

Today we all split off into three different groups to go out and explore the area of Yanaka on our own. Each group set off, map in hand, with the task of finding interesting sites, shrines, or other areas of historical importance.

Groups A and B visited the Rikugien Gardens in the morning and got conveyor belt sushi for lunch. The Garden was beautiful and amazingly tranquil compared to most of bustling Tokyo. In the afternoon we walked around Yanaka Ginza shopping street to get an experience of old Tokyo.

Group C set out and visited Asakura Museum of Sculpture, which contained a special exhibition of cat sculptures before leading into a traditional style Japanese house that surrounds a beautiful Japanese style garden. The calligraphy museum, Shikien Hozonkai, three modernised Buddhist shrines and four Shinto shrines were also visited throughout the day before all the three groups met again at the train station. After regrouping, everyone set off to visit the Intermediatheque and old train station which had a great view of central Tokyo below. That night, everyone went out for a night at Karaoke, not returning to the hotel until 3am.

● DAY FIVE — 13th September

We began today by visiting Kokugakuin University Museum, which contained a large selection of Shinto objects, a Jomon flame pot, and many other artefacts. They have a large collection of over 100,000 objects in their archive. After having lunch in the cafeteria, we took the train to visit Todoroki Valley River.

After walking alongside the river, we came across a pathway that leads to Noge Otsuka burial mound (kofun). This mound is now overgrown and the original stone structure is now covered in grass, but the original shape is still maintained. We continued to walk around the area, following the river back and stopping to view a Buddhist shrine that was located alongside a waterfall. After spending some time here viewing the shrine, we headed back towards the train station, stopping for ice cream along the way.



井の頭線渋谷駅にある「明日の神話（故・岡本太郎氏）」巨大壁画の前で

That night, we all decided to stay in and play card games at the hotel as we had gone out the night before.

● **DAY SIX** — 14th September

On this day we explored our local area – Ueno. We were given a tour of Ueno Park by Dr Akira Matsuda, who talked us through the (now to a large extent forgotten) history of Ueno Park, such as the fact that it was the site of the Battle of Ueno in 1868 and that in the park there is a kofun burial mound. The fact that there are very few, if any, information boards explaining the history of this park to the public was pointed out to us, and it was interesting to see just how much the park was seen by the people of Tokyo as just a park with a zoo, rather than a historic site.

After the tour of the park we went to the Tokyo National Museum, a huge museum complex comprised of five buildings. We had a chance to look around the Honkan building, which displays Japanese art from 10,000 BC to the present, the Tōyōkan (Asian Gallery) building, and the Heiseikan building which contains an exhibition of Japanese archaeology. We had lunch in the canteen of the Tokyo Art University, and then headed to the Kabuki theatre to watch ‘The Return to Glory of the Genji Clan – Reverse Rowing’. Watching Kabuki was an excellent and surprisingly understandable experience which we would strongly recommend (though the plays can apparently be much more complicated than the one we saw!). In the evening we went to Shinjuku, played around in a photo booth, went to an arcade, and made yet another trip to donki.

● **DAY SEVEN** — 15th September

Another busy day! We visited the National Museum of Modern Art in Tokyo (MOMAT), where we saw a special architectural exhibition on the Japanese House throughout different periods.

The next stop was the National Art Centre, Tokyo in Roppongi, where we saw the ‘SUNSHOWER: Contemporary Art from Southeast Asia 1980s to Now’ exhibition on how colonialism and imperialism has affected countries in and around the Pacific Ocean.

For lunch, some people went to Starbucks, and others went to try McDonald’s’ intriguing Chicken Teriyaki burger. The last stop was the Mori Museum of Art located within the Roppongi Hills Mori Tower, which highlighted more objects and themes of the SUNSHOWER exhibition. Following this we climbed up to the Sky Deck, which is on the roof of the building (floor 52), allowing us to take in the sights of the entirety of Tokyo and Mt. Fuji in the distance, where we stayed almost an hour.

Hokkaido part

● **DAY EIGHT** — 16th September

Today we were planning to have a more relaxing day than usual, as much of our time was to be spent travelling from Tokyo to Hokkaido. Plans took a turn for the unexpected, though, as Stephen realised only a half hour before we were due to leave that he had lost his passport. After some frantic calls made by Kunikita-sensei, it was decided that he and Stephen ought to stay behind for the remainder of the day to file a police report and contact the American embassy, and then catch a later flight to Hokkaido and meet us there. The rest of us left on time without him, and said our goodbyes to Tokyo (at least for the time being).

We left for Haneda airport by train and it was lovely to travel on a monorail through the city and soak up the amazing skyline and the sunshine on the water one last time. We arrived at Memanbetsu airport at 2pm and were met by the staff at the Tokoro Fieldwork Station. From there we travelled on by the minivan which became our constant companion for the next week. Both journeys were quite short, only an hour or so, and I think we all had

the best of intentions to catch up on University reading during the time, but most people either slept, tired from the week we just had, or enjoyed the beautiful views; the wide sea vistas and endless fields of Tokoro seemed a world away from the crowded city streets and neon lights we had gotten used to. I had never seen so much green space in my life.

In the evening, we were treated to a welcome dinner, a dish called Genghis Khan, which the teachers prepared for us; hot plates with sizzling strips of meat, and cabbage and beansprouts, and plenty of beer. After settling in and exploring a little, a group of us all made good use of the bikes and went for a cycle around the local area, or walked down to the beach by the lake, which was full of giant shells that the tide had turned up. The sun sets much earlier here because we are so far north – at around 6pm – so we headed out in the sun, and by the time we made it home it was dark (and Stephen had arrived!). We managed to see the sun setting over the lake, with the mountains in the distance, and it was very beautiful.

● **DAY NINE** — 17th September

The morning began with a lecture on Prehistory in Hokkaido by Kumaki-sensei. Following this, we went on a tour of the historic park and sites within Tokoro. After learning about the various tools, objects and cultures associated with different cultural periods, we visited a local museum that is run by the Tokyo University. This gave us a chance to view examples of the objects that we had previously discussed.

Following this, we viewed the reconstructed pit dwellings located nearby before visiting another local museum. That afternoon we drove to an old school that had been repurposed as the Tokoro Folk-Culture Museum since it was shut down. This museum contained objects related to the school, as well as the local community. As Bea, a member of our group, was feeling unwell she returned to the house while everyone else visited a local shell mound. The mound was not very visible unless you knew that it was there as it was covered in grass and was very far inland due to the change in sea level over time.



北海道の先史文化概説（講義）（常呂の部・担当講師による先史文化の講義）



博物館見学（常呂の部・北見市ところ遺跡の館を見学する参加者）

● **DAY TEN** — 18th September

This was a day filled with some fun bits of experimental archaeology. We remained at our home-base within the University of Tokyo's Tokoro buildings all day. In the morning we had a lecture on the pre-history of Hokkaido, and learnt how in Hokkaido, in contrast to on Honshu and the rest of Japan, the Epi-Jomon, Satsumon and Ainu cultures followed on from the Jomon period. The interactions between contemporaneous cultures, and the development of Okhotsk and Tobinitai cultures on coastal regions, were also explained.

After the lecture we tried our hand in creating Jomon style comma-shaped beads. This involved a lot of sanding and some frustration as Takashi, Daiki and Kazu seemed to create beautiful beads with a bizarre amount of ease while the rest of us were left behind with much less bead-like looking beads. Stephen dropped his and it broke.

After a lunch of bento boxes we returned to the laboratory room to do some pottery refitting. It was great to get our hands on some really beautiful bits of archaeology. The pot sherds were mostly dated from the Epi-Jomon. The refitting was quite difficult, but we managed to refit a few pieces. In the evening the typhoon hit and we had a quiet evening in, playing cards and chatting.

● **DAY ELEVEN** — 19th September

We woke up excited today as we would finally have the chance to excavate an archaeological site – Oshima 1 site.

We were taken to the site by minibus, and there we saw a pit-dwelling that had been surveyed, ready for cleaning and excavation. We cleaned up the pit first, taking out the topsoil around and inside the pit. There were thousands of mosquitoes so everyone was drenched in insect repellent.

Luckily, as a group we found a few Satsumon period pot shards and some Epi-Jomon period shards. We did not spend the whole day here, although many wanted to keep on digging.

In the evening, we were visited by 3 local people who brought us extremely delicious food, such as corn and salmon. We introduced ourselves to each other and proceeded to have a small feast to celebrate the summer program.



遺跡発掘体験（常呂の部・「大島1遺跡」で記念撮影）

● **DAY TWELVE** — 20th September

Day 12 was probably the longest of all the days during the program; we set off early, as we had a lot of ground to cover. We began with an hour long drive in the trusty minivan to head to the Koshimizu Gensei-Kaen wildflower garden, which overlooked the sea. It was too late for there to be many blooms left, but the winding walk through big grasses and shrubs filled with butterflies with the mountains in the distance was still exceedingly pretty, and the views of the mountains in the distance were made all the more beautiful for the lovely clear skies and sunlight. We had been lucky – it was one of the first days of good weather since the typhoon came bringing storms earlier in the week.

We then travelled on to Shiretoko, a UNESCO world heritage site at the northernmost tip of Hokkaido. The name in the Ainu language reflects the pointlessness of the tip of the land, surrounded by sea and mountains on all sides. We began at the Shiretoko museum, a deceptively large place which as well as having a rather impressive taxidermy collection (particularly of bears, for which the area is most famous), also had a large botanical garden with a cage for injured eagles and a replica of a Jomon dwelling, which one could enter and rest a while in by the fire. A short way up the coast was the Shiretoko conservation centre, which had a large standing display exhibiting the plant and wildlife which is native to the area. We dressed up as bears (dressing up appears to be a staple of Japanese museums), and ate ice creams by the sea, before heading up into the mountains to Shiretoko pass, some 738 meters above sea level. The views were spectacular; a large mountain, wooded valleys, and the sea all around us; you could see the tip of Siberia.

Below the pass were the Shiretoko Goko lakes in the valley, which we strolled through as sun began to set. It was very green, and the sky was beginning to redden and was reflected into the sea. Despite the wooden pathway which wended above the lakes to a viewing platform, the area felt very untouched; open, and with lots of clean air and natural life. We stayed a while to soak in the scenery, before beginning home. We had one last pit stop, a short

climb up to the Oshinkoshin waterfall, which fell over the cliffs and ran down to the sea. We looked for salmon in the river below, but had to make haste back to the van and the heavens opened with probably the heaviest rain we had experienced all trip. We drove back home in the dark, and fell asleep to the sound of the crashing waves and hailstones hitting the windshield.

● DAY THIRTEEN — 21st September

Our last day of activities in Hokkaido. The day was spent in looking around many museums. The first was the Museum of Northern Peoples. This was an excellent museum: the fact that all of the cultures displayed were connected by the common theme of their relation to the northern sea made the museum very ethnographically comprehensive. It allowed the visitor to make comparisons yet also recognise the great scope of cultural difference, and the great varieties of ways which people can adapt to and thrive in a very challenging natural environment. The museum also had games to play with and costumes to try on.

After this museum we visited the Abashiri Local Museum, which was housed in a beautiful architectural building built in 1936, and exhibited a lot of taxidermy, along with prehistoric archaeological artifacts from the local area. The museum boasts being the oldest remaining museum in Hokkaido.

We then headed to the Abashiri Prison Museum where we had a 'prison lunch' (which was surprisingly nice of miso, mackerel, rice, radish, and cold noodle) and then explored the site. It is an outdoor museum made of moved, but original prison buildings, and it had hundreds of slightly creepy life-sized model prisoners.

On the way back to Tokoro we visited the Moyoro Shell Mound Museum, which had reconstructions of an Okhotsk cemetery within the exhibition, and then viewed the excavated pit dwellings associated with the museum. In the evening we said our goodbyes to Stephen with fireworks and a trip to the beach to look at the stars.

● DAY FOURTEEN — 22nd September

Stephen left early on the morning to head back to Tokyo early and sort an emergency passport before travelling back home the next day. A few of us got up early to see him off, and then made use of the spare time before classes began to eat a monumental breakfast – something which had been one of the highlights of our time at the Ueno Terminal Hotel.

Class began at 9:30, and was delivered by Matsuda-sensei, a lecture on presenting Dogu in UK museums, where he reflected on his time working on two British exhibitions (one at the British Museum, and another at the Sainsbury Centre for Visual Arts). After seeing so many Dogu – and Japanese exhibitions in general – it was really interesting to get a feel for the kind of decision making processes (both theoretical and pragmatic) that occur behind the scenes of exhibitions.

After this time we enjoyed our last bento lunch, which had the most delicious tempura prawns – English food will seem decidedly more boring when returning home – before cracking on with writing these reports. It is a bittersweet process; for many of us, it seems very strange and somewhat sad to think that in a mere 24 hours or so we will be on planes scattering back all over the world. None of us seem quite ready to say goodbye to Japan, or to each other. However, spending a last afternoon together in the sun reminiscing over all that we have experienced and achieved in the past two weeks, is a nice way to draw the summer school to a close. Later this afternoon there will be another party – the third this week! – and a ceremony to present us with certificates, to close the program.

Thematic Report

Bea Hannay-Young, Enya Hyde, Flora Lloyd James, Jose Alejandro Salgado-Espinoza, Stephen West

Theme 1: Heritage and Museums in Tokyo versus Tokoro

Over the course of the program, we spent equal time in Tokyo and Hokkaido, allowing all of the students to experience the two different paces of life. Tokyo, being a very large city, was bustling with people and the tall buildings were all densely packed together, which allowed little room for greenery. In contrast, the standout features of rural Hokkaido are the natural surroundings such as the mountains and lakes that dispersed around the area.

While there are some pockets of green in Tokyo, these are often associated with tourist attractions as well. For example, Ueno Park had many museums, shrines, and a zoo that all attracted many visitors and made it very crowded at times. Even while in the park, you could very easily see the large buildings that surrounded you and reminded you that you were still in a large urban space. Similarly, the parkland that surrounded Meiji Shrine were also bustling with activity and people as it is a very big tourist attraction. As you drive through Hokkaido, you will notice many farms and lakes, which help create the sense of open space that you are unlikely to get in Tokyo. Even when visiting the local museums in Hokkaido, you will notice that they cover very different themes.

The museums that we have visited in Hokkaido all often highlighted local history. For example, the Tokoro Folk-Culture Museum was filled with objects that had been donated by the local community. Taxidermy was also often a prominent feature in the museums, which again highlights the connections people have to nature within rural Hokkaido. There were less artworks displayed in the Hokkaido museums than the museums visited in Tokyo, and also tended to use very traditional methods of displaying their objects in cases. Many, if not all of the museums in Tokyo featured art, or otherwise curated the exhibits to be aesthetically appealing to the visitors. There was also a high number of art museums in Tokyo, ranging from modern art to traditional. One big difference between the curation of museums between Tokyo and rural Hokkaido is that the exhibits on Tokyo often displayed works or artefacts that had international origins. This was not seen in rural Hokkaido, where the objects were almost exclusively from the local area.

Theme 2: Foreign Language Accessibility in Japanese Museums

After having visited many museums and similar cultural buildings, we have noticed this theme of language and how accessible museums are in terms of a foreign explanation being available.

In Tokyo, many museums catered towards an international audience where they provided language translations in some cases, such as English and Mandarin. However, it seemed that it was not a main concern of many museums to actively translate description boards or provide audio guides into other languages (Again, English and Mandarin being the main languages to translate into).

One of the only museums (that we visited) to make the effort to translate into several European languages was the Edo-Tokyo Museum, which may not be much of a surprise as it covers a period that is extremely popular within an international context (lots of movies, books, and art are inspired by this period in Japanese history). On the other hand, the oldest and largest museum in Japan, the Tokyo National Museum, does not provide such a range of language options.

Surprisingly, museums in Hokkaido all offered English audio guides, and most of the staff could converse in English as well.

The main issue is whether Japan should cater towards a larger international audience. Language is a complex mechanism that when altered can lead to misinterpretations or loss of meaning. It is perhaps also an idea that should not be imposed upon others, just as culture should not be forced but rather enjoyed in its original state, and upon the participant's willingness to indulge in a different cultural experience.

Most of the international students, after a day or two, decided that using audio guides and similar translation tools took away the enjoyment and appreciation for the artefacts or artwork they were observing.

In conclusion, Japanese museums should cater for language barriers to some extent, but it really should not be a necessity, especially since we live in a time where anyone can learn a new language with ease, and this way visitors can really live the Japanese cultural experience.

Theme 3: National Treasures: Designating Cultural Importance to Japanese Sites and Artefacts

It was agreed that something which struck the Western students as the most different with regards to the practice and conservation of heritage in Japan was the complex system which seems to dictate the designation of significant artefacts and places. We quickly learned the term 'national treasure', an epithet bestowed upon the most important sites and objects from Japanese history. Museums were often very quick to direct visitors towards and showcase the national treasures – or their lesser counterparts, important cultural properties – amongst their collections. National treasures are considered to be of such importance that the photographing of them is forbidden – an especially significant rule considering that most museums seem to offer many more interactive and social-media friendly displays than are common in the West.

We learned the rules for elevation to National Treasure status – a piece must show 'outstanding workmanship, a high value for world cultural history, and exceptional value for scholarship', terms defined by the Japanese Agency for Cultural Affairs, a government body which is responsible for designating and conserving Japan's heritage. We have seen some beautiful examples of national treasures during our time in Japan – the 'Jomon Venus' Dogu is perhaps the most iconic, but the National Museum in Tokyo had many; the Jomon fire pottery and Kofun engraved iron swords also spring to mind. Even Tokyo tower, which we could view from the balcony of our hotel in Ueno, is a registered tangible cultural property.

The efforts of museums and councils to elevate their spaces and artworks higher up the bureaucratic ladder of heritage designation, towards national treasure or indeed, UNESCO world heritage sites in the case of both Nikko and Shiretoko, seems partly towards a significant increase in resources which accompany the awarding of these labels, such as an easier access to conservation materials and practices. It also seems to offer a boost in tourism, with Bausch-sensei noting on our walk of the Todoroki valley that councils often see an increase in visitors immediately in the aftermath of places being named as 'important'.

Such a system seems unusual to a Western visitor – though of course we have our own significant pieces of tangible heritage, they are not so clearly and comprehensively enshrined in legislation, with, for example, archaeological sites being often under split management between various groups such as English Heritage and the National Trust as well as universities, museums, and research institutes. Though many of these bodies are, in the case of Britain at least, of course related to the government, neither the sites themselves, nor their managing institutions are ranked in such a clear and uniform way.

Indeed, the term 'national treasure' in the United Kingdom would be more easily applied to a series of (archaeologically questionable) Nicholas Cage movies, or a beloved ageing television personality. In discussion, we were pressed as a group to denote articles of British heritage which may have been worthy of the title 'national

treasure' – perhaps the Sutton Hoo burials, or the crown jewels? With regards to sites, the Tower of London and Stonehenge seemed natural examples. We came to realise that if we were to direct visitors to the most culturally important artefacts within British national collections, you would likely be looking upon paintings by Dutch Masters, or collections of Egyptian coffins. There seems to be less of a culture of introspection with regards to British and Western heritage – and perhaps also less of a fostered and celebrated culture of national pride.



網走市立郷土博物館にて

平成29年度夏期特別プログラム日誌

瀬戸多加志、渡邊春香、河野奏人、中川大樹、八田紘和

東京の部

●1日目 — 9月9日(土)

プログラムは本郷でのガイダンスから始まった。文学部の佐藤健二学部長からご挨拶を頂き、その後お互いの自己紹介を英語で行った。ガイダンスの後、ホテルに向かい一旦休憩をした後、希望者を募って浅草に行くことになったが、全員が希望したため皆で一緒に浅草に移動した。雷門で写真を撮ったり、仲見世通りで揚げ饅頭を食べたりと、楽しい時間を過ごすことが出来た。浅草寺ではおみくじや手水、お賽銭などを英語で説明し、早速英語でコミュニケーションを取る機会が沢山あり、良いトレーニングになった。その後ホテルで夕食をとったあと、皆で上野公園を散策した。不忍池の方まで行き、噴水の近くで「なぜこのプログラムに参加したのか？」のようなことを皆で話した。明日の集合時間が早く、海外から来た学生達はかなり疲れているようだったため、早めにホテルに帰って就寝した。

●2日目 — 9月10日(日)

二日目の午前中は再び東大に行き、文学部の大貫教授から日本の旧石器時代から古墳時代にかけての生活の様態や土器などに関して講義を頂いた。私は文学部の学生であるため、いつも使っている広い大教室で10人だけで授業を受けるのは新鮮な感じがした。今回の海外学生たちは皆、考古学系統の学科に所属する人たちだったため、講義の後の質疑応答では積極的に発言しており、日本人学生一同感心すると同時に、負けていられないと気が入った。その後、普段公開されていない文学部の列品室を見学させていただいた。様々な時代と場所の貴重な展示が多数あり、先生方に説明してもらいながら皆で廻った。



本郷キャンパスでの座学と見学実習（東京の部・考古列品室において担当講師から解説を受ける参加者）

それから両国で海鮮丼を食べた後、午後は江戸東京博物館に行った。午前に勉強した古代とは時代こそ違うものの、海外学生からすれば「Samurai」や「Edo」など、まさに思い描いていた「昔の日本」が再現されているようで、皆興奮していた。江戸の町並みのパノラマや当時の建築の再現等、海外学生にもわかり易いものから、当時の幕府の意思決定システムや明暦の大火の影響など、受験生時代に日本史を勉強した日本人学生にとっても興味深いものまで幅広い展示があり、楽しめた。ここでも海外学生に英語で展示に関して説明する機会があった。この頃になると私達も大分肩の力が抜けて無理になんでも説明しようとせず、自然に海外学生とおしゃべりが出来るようになってきた。

昨夜はみんなで行動したため、今夜は各々の行きたい場所ごとにグループを作り、渋谷にショッピング組、上野のアメ横やドンキホーテに行く組等に分かれて楽しんだ。

●3日目 — 9月11日(月)

この日は日光への見学の予定があったため、皆頑張って早起きして集合。上野から一旦浅草に行き、そこで東大の特任准教授のイローナ・バウシュ先生と合流し、いざ日光へ出発。私はバウシュ先生の隣の席に座り、先生が現代のアイヌの人々がどのようなコミュニティをつくり、どのように暮らしているのか等に関するお話をしてくれた。とても楽しく、また大変勉強になる時間を過ごすことができ、約2時間の移動時間もあっという間に過ぎていった。バウシュ先生、どうもありがとうございました。

日光に着いて、まずはバウシュ先生から初代將軍家康と三代家光に関して説明して頂いた後、早速家康を祀った東照宮に向かった。先生の説明にあったように、家康の権威を高めるための豪華絢爛といった装飾の数々に皆圧倒されていた。その他には、三猿や眠り猫など可愛い動物の彫刻が女性の海外学生たちに人気だった。昼食は名物の湯葉をつかったそばやうどん、ラーメンなどを食べた。この時、ラー油と一味を英語で説明しようとして悪戦苦闘した。

午後は家光を祀った家光廟大猷院に行った。東照宮より規模は小さめながら、竜宮城を思い起こさせる皇嘉門など興味深い建築が多く、皆で自由に見学して回った。大猷院を見学している途中で激しい雨が降ってきた。東武日光駅に着く頃には雨は止んでいたものの、大分寒かったため、予定していた名物のかき氷ではなくカフェで一休みしてから帰ることになった。

帰りの電車では皆疲れて寝てしまうかと思いきや、恐るべき海外学生たち。2時間しゃべりっぱなしでも平気という感じだった。この日には海外学生同士も仲良くなり、夕食時には各国の料理に関する大激論が繰り広げられた。主にイギリス人学生とアメリカ人学生の間で凄まじい論戦が行われ、なかなか日本人学生はその間に入っていきなかった……。食に関する話はなかなか危険なものである。この日は朝から長時間の移動で疲れていたため、部屋で皆集まって明日の予定を話し合ったり、カードゲームなどをしたりして過ごした。

●4日目 — 9月12日(火)

この日は事前に班分けがされており、日本人学生中心に予定を立てて各班自由の下町を散策することになっていた。私達の班は午前中に六義園に行き、日本庭園を海外学生に説明したり、庭園の中のお茶屋さんでお抹茶と和菓子を味わったりした。園内を見学した後、海外学生の希望で回転寿司に行ってみた。寿司の食べ方を説明するのが大変だったり、海外学生が面白半分に変なお寿司を頼んだり、わさびを食べて悲鳴を上げる学生がいたりとハプニングも有ったが、皆とても楽しんでくれて、回転寿司にしてよかったとホッとした。午後は日暮里から谷中銀座へ行き、レトロな商店街を楽しんだ。海外学生からは特に雑貨屋さんや陶磁器のお店が人気だった。が、一番人気だったのは100円ショップだった。「100円でこのクオリティのものが手に入るのか!」とか「こんな用途の商品が存在するのか!(孫の手などを見て)」といった様子で感動していた。

その後、日暮里駅に集合して皆で東京駅に向かい、日本郵便と東京大学総合研究博物館が協働で運営をおこなうインターメディアテクを見学した。館内には東大が蓄積してきた学術文化財がスタイリッシュに展示されており、展示に関する説明文も最小限でシンプルなものになっているなど、今まで見学してきた博物館とはまた違った雰囲気を感じる事が出来た。最後に同じ建物内にある旧東京中央郵便局長室を見学して帰路についた。

ホテルで夕食を取った後、みんなで予てから計画していたカラオケに行くことになった。初めてのカラオケにテンション上がりまくりの海外学生達は、3時間ほとんどぶっ通しで歌い続け、その凄まじいエネルギーにびっくりした。歌いまくり、もう何曲目かわからなくなった頃、ようやくみんな満足したようでホテルに帰った。

●5日目 — 9月13日(水)

朝ホテルのロビーに集合し、まずは國學院大學博物館に向かって出発。同館に到着してバウシュ先生と合流し、見学を行った。企画展では旧石器時代から現代までのモノ作りに関する展示がされており、バウシュ先生と國學院大學の内川先生の充実した解説の下、貴重な文化財をじっくりと鑑賞することができた。特に古墳時代の琥珀製の勾玉は一点しか存在しないとのことで、大変貴重なものを見学できた。また当時の高い技術を示す江戸時代の染物には、海外学生の間で感嘆の声が上がっていた。見学後はそのまま國學院大學のカフェテリアで昼食をとった。その後、渋谷駅に戻り、渋谷のスク



歴史文化遺産サイト訪問 (東京の部・野毛大塚古墳の前で休憩)

ランブル交差点と岡本太郎の壁画を見学した。岡本太郎の「明日の神話」を見た際に、彼の作品と縄文美術の関連についてパウシュ先生に解説して頂き、今まで何度も見ていた作品と縄文時代との関連性を知ることができて興味深かった。

午後は等々力溪谷を散策した。まず地上と溪谷で温度が大分違うことにびっくりした。溪谷の中は明らかに涼しく、温度計を見ると地表より3℃くらい低かった。溪谷の地層や植物を観察しながらしばらく散策を続け、途中に野毛大塚古墳に立ち寄った。周囲は公園になっていたが、古墳の頂上部には刀剣や勾玉などが発掘された場所に目印が付けてあり、パウシュ先生からこの古墳に纏わる身の毛もよだつ怖い伝説も聞かせてもらった。みんな昨晚のカラオケで疲れていたためか、ここで少し休憩し、古墳の前で記念撮影をしてから出発。再び溪谷の散策に戻った。ひと通り溪谷を見学した後、日光訪問時とは打って変わってとても暑い日だったため、皆でジェラートを食べてホテルに帰った。

夕食後は日本のバンドのCDを買いだめしたいという海外学生のため、数人で秋葉原のタワーレコードに行った。帰りに、これまた日本の音楽ゲームが大好きな学生がいたため、ゲームセンターに寄り、皆でゲームをしたりダーツをしたりして楽しみました。

●6日目 — 9月14日(木)

この日は朝早起きし、東京大学の松田先生に解説をして頂きながら一時間ほど上野公園を散策した。上野公園にも実は古墳があることにはびっくりした。一見するとただの丘だが、松田先生にこの古墳に纏わるいろいろな話を頂き、自分たちが思っていた以上に古代といわれる時代のものが普段暮らしている東京に存在することを実感した。公園を抜けてそのまま東京国立博物館に到着。平成館で日本の考古学に関する展示を見学した後、それぞれ自由に本館を回った。プログラムの最初の頃は、日本人学生が先生達にくっついてぞろぞろと回るのに対し、海外学生達はみんな自由に動き、先生が一生懸命解説していても違うところに行ってしまうたり、そうかと思うと急に戻ってきたりという感じだったが、この頃には、先生たちを含めてみんな自分のペースで回っていた。その後、東京芸大の食堂で昼食をとった。食事時は相変わらず海外学生の間で激論が交わされていたが、日本人学生も少しずつ会話に入っていくようになった。

午後は希望者を募って歌舞伎を見に行くことになっていたが、ほとんど全員が希望したため、宿舎で休みたい人以外はみんな歌舞伎座に行くことになった。チケットを買った後、開演まで2時間程が空いていたため、銀座でショッピングやおみやげ探しをして時間をつぶした。演目は「逆櫓」というもので、アクションが多くて話もわかりやすかった。海外学生だけでなく日本人学生も初めて歌舞伎を見る人が多かったのだが、皆満喫できた。

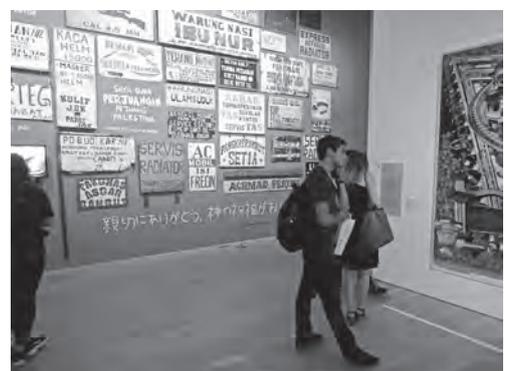
夜は新宿に行き、歌舞伎町を見てみたり、新宿東宝ビルのゴジラの写真を撮ったりして楽しんだ。

●7日目 — 9月15日(金)

東京プログラム最終日！この日の午前中は東京国立近代美術館を見学し、日本の住宅に関する特別展を中心に回った。この一週間は竪穴式住居に関する話ばかり聞いていたため、改めて戦後から現代までの近代日本の住宅の系譜を知ることには新鮮な思いがした。

午後は国立新美術館と森美術館にまたがって開催されている東南アジアの現代美術展を見学した。近代に帝国主義の植民地となった東南アジアに関する展示を見ながら海外学生たちが議論していたことが印象的だった。美術館を出た後、森ビルの展望台に登り、東京を一望した。今まで訪れた様々な

場所を見ながら、東京での思い出をみんなで話し合った。明日の飛行機が早いので、夜は皆で荷づくりを終わらせた後に室内でできるゲームをお互いに教えあったり、実際にやってみたりして過ごした。



美術館・博物館での実習（東京の部・森美術館を見学）

文責：瀬戸多加志

北海道の部

●8日目 — 9月16日(土)

今日は東京から北海道へ移動する日。出発前、事件が起きた。海外学生の一人がパスポートを失くしてしまったのだ。これまで訪れた施設にパスポートの落とし物がないか手分けして電話で確認したり、一緒に彼の荷物の中を探したりした。結局、残念ながらパスポートは見つからず、彼はプログラムの最終日前日に一足先に北海道から東京へ戻り、臨時パスポートの発行手続きをすることになった（パスポートの再発行手続きを行う大使館は平日にしか開いていないのである）。

北海道に着くと、大きく澄み切った空が私たちを出迎えた。東京ではなかなか味わえないであろう大自然に心が躍った。宿舎に到着後、私は他の数人とともに夕日を眺めに行った。徐々に沈んでいく夕日の姿をじっくりと眺めることができた。この日のように夕日が隠れずにきれいに見える日は珍しいという。私たちは幸運だった。夜はジンギスカンで歓迎会を楽しんだ。

●9日目 — 9月17日(日)

今日の午前中は熊木先生が講義を行われ、北海道の先史時代からアイヌ時代までの概略をお話しして下さった。続縄文文化以降の北海道固有の文化の特徴について、考古学上の発見を中心に学んだ。その後、東京大学文学部が運営する常呂資料陳列室を見学した。土器が時代ごとに展示されており、午前中の講義の内容を肉付けすることができた。

午後は常呂町内の遺跡や資料館を見学した。特に印象に残ったのは常呂町郷土資料館である。ソビエトで使用されていたという軍服と手袋が展示されていたのだが、生地がとても薄く寒そうだった。物資が不足していたからであろうか。過酷な当時の様子が伝わってきた。

常呂滞在中の夕飯は、5人ずつに分かれた2つのグループが交替で作る。今日は私を含むAグループが夕飯を担当した。イギリス人学生が体調を崩していたため、イギリスで風邪をひいた時によく食べるというチキンスープを料理上手な学生が振る舞ってくれた。鶏肉をフライパンで一度かりっと焼くなど、手の込んだ料理だった。その他には焼きそばをホットプレートで作り、全員で囲んで食べた。日本食が苦手な学生も含め、全員でおいしく食べることができたと思う。

●10日目 — 9月18日(月)

今日は台風が北海道に上陸したため、屋内での活動が中心だった。午前中は勾玉に関する簡単な講義を受けた後、実際に勾玉の製作を体験した。イメージ通りの形にするのはなかなか難しく、皆黙々と集中して取り組んでいた。各人が思い思いの勾玉を製作し、その日一日は多くの学生がめいめいの勾玉を身に付けていた。

午後はまず、翌日発掘体験に行く大島遺跡についての講義を受けた。私たちが発掘体験を行うのは大島1遺跡であるのだが、講義ではすでに調査が終了している大島2遺跡のNo.1~3の調査結果について学んだ。講義の後は、土器接合作業の体験をおこなった。考古学を専攻している海外学生がやる気満々で取り組んでいた。土器の破片は量が多く、また多様な模様があったため、私は当初途方に暮れてしまったが、最後に接合可能な土器のペアを見つけることができた。実際に出土した土器の破片を手にとることができたこと、また土器接合作業の苦勞を知ることができたことは、貴重な体験だった。接合体験終了後、今日接合した続縄文時代の土器の特徴について熊木先生が写真を見せながら解説して下さい。破片の模様を観察し、接合できそうな別の破片を必死に探した体験を踏まえての説明であったため、知識が体験と結びついて自分の中に定着していくのを感じた。

夕食はグループBが鍋を作ってくれた。常呂の夜はとても寒いのだが、鍋料理で体を温めることができた。

●11日目 — 9月19日(火)

今日はいよいよ発掘体験の日。海外学生のうち数名は発掘調査を経験したことがあったようだが、日本人学生全員にとっては初めての体験であった。発掘体験をした遺跡は今年調査を始めたばかりの遺跡であったため、私たちはまず表

面の土をスコップで10cmほど掘り下げた。植物の根がしっかりと生えていたため、想像以上に力が求められる作業であった。表面の土を取り除く作業中、いくつかの土器の破片を発見した。熊木先生によれば1つの竪穴住居を掘るのに合計で3カ月程かかるという。とても地道な作業である。こういった地道な調査の積み重ねが考古学の発見につながっていくのだと思うと感慨深かった。また、私たちも考古学の調査にほんの少し貢献できたかもしれないと思うと嬉しかった。

宿舎に戻った後、何名かで近くの温泉へ行った。海外学生にとっては初めての体験だったようで、わくわくしているようだった。特に美しい景色を楽しめる露天風呂に驚いていた。

今日の夕食は、地元の方を交えて焼肉をした。農協の方によると、常呂の食糧自給率は約3000%だという。これには皆が驚いた。地元の方に収穫したてのとうもろこしなどをいただいた。常呂の新鮮な食べ物を味わうことができた。

●12日目 — 9月20日(水)

今日は知床方面へ車で出かけた。斜里町立知床博物館では知床半島の生い立ちや知床の動物について学んだ。ここには屋外に縄文時代の住居の復元があり、中に入ることができた。住居の中では管理人の方が火を焚いて煙を住居内に充満させていた。虫よけと住居の保存のためだという。少しだけ縄文人の暮らしを体験できたような気がした。その後、知床峠、知床五湖、オシンコシンの滝を訪れ、美しい大自然を堪能した。目の前に広がる風景に感動の連続であった。

道中にたびたび「野生動物にエサを与えないで」という注意書きを見た。人からエサをもらうことに慣れてしまった野生動物が、あやまって人を襲ってしまったり車にひかれてしまったりといった事故が起こることがあるそうだ。人間と野生動物との間で一定の距離を保つことがお互いにとって重要なことであるということを知った。

行きは天気良かったものの、帰りは大雨だった。時には雹も降り、知床の気候の激しさを体感した。長時間の車での移動であったが、運転していただいた先生方には本当に感謝している。ありがとうございました。

●13日 — 9月21日(木)

今日は網走市内の4つの博物館を見学した。どれも特色豊かな博物館であった。まず1つ目は北海道立北方民族博物館である。この博物館は、広く北方諸民族の文化を紹介する博物館である。特に印象的だったのは、衣服についての展示である。色鮮やかで凝ったデザインの服が展示され、北方民族の感性の豊かさが伝わってきた。また、アザラシの腸で作られた衣服も展示されていた。この衣服は防水性に優れており、水上での猟や船旅の際に使用するそうである。北方民族の知恵と、物を大切に作る精神に感心した。

次に網走市立郷土博物館を訪れた。北海道で常時開館している博物館の中でもっとも古いものだという。スタンドガラスの窓やらせん階段などの洋風なデザインが印象的だった。この博物館では動物の標本が今にも動き出しそうなリアルな形で展示されていた。

次に向かったのは博物館網走監獄である。ここではまず、現在の網走刑務所で受刑者が実際に食べているメニューを再現した「監獄食」を食べた。次に広い敷地内を各自自由に回ったのだが、北海道の開拓に従事させられた網走監獄の囚人たちがその苦役のため命を落としたという悲惨な歴史や、網走監獄の脱獄に成功した男の驚きの脱獄口など、網走監獄にまつわる興味深い歴史を学ぶことができた。特に重要文化財に指定されている舎房は、中央見張所から5つの棟が放射状に広がる形をしていて印象的だった。

最後にモヨロ貝塚館を訪れた。当初考古学の資料と考えられておらず長い間放置されていたという大きな熊の顔のオブジェの話が面白かった。熊のオブジェをよく見ると、どれも穏やかな顔をしている。熊は今も昔も人間を襲うことのある恐ろしい獣だと思うのだが、この熊の表情を見ていると昔の北海道の人々の熊への愛着のようなものを感じる。

夜は地元の漁師さんからいただいた鮭でちゃんちゃん焼きをした。また夕食後は花火と星を楽しんだ。大きめの花火



博物館見学(常呂の部・博物館網走監獄の牢獄にて)

を楽しむのも良かったが、線香花火を皆でじっと見守ったのも良い体験になった。

●14日 — 9月22日(金)

この日の朝は、パスポート再発行のため一足先に東京へ戻る学生を皆で見送った。その後、松田先生による講義を受けた。講義のテーマは、先生が実際に携わった大英博物館とセインズベリー視覚芸術センターにおける日本の土偶の展示についてであった。イギリスで日本の先史時代の展示を行うということで、時代も場所も全く違うものを効果的に展示することがいかに難しいことであるかを主催者の視点で語ってくださり、興味深かった。特に印象的だったのはセインズベリー視覚芸術センターでの展示についてのお話である。この展示では、なぜ人々は人間の形をしたものを作るのか、それは人間にとってどのような意味があるのかといった疑問を土偶を通して探求していくものであった。そしてその答えの1つの可能性として、人間の形をした小さなものを作ることで人々はミニチュア化した世界を手にすることができるからではないかということが考えられるという。私はそのような視点で土偶について考えたことがなかったため、知的好奇心がかきたてられた。

午後はレポートの執筆と修了式、そして送別会を行った。修了式では立派な修了書をいただき、何だか誇らしい気持ちになった。

プログラムを終えて

北海道では概して晴天に恵まれ、とても気持ちの良い青空を楽しむことができた。気候は涼しく、北海道にはすでに秋が訪れているようだった。

このプログラムでは様々な国の学生と寝食をともにし、美術や歴史、考古学について学んだ。海外の学生と2週間という比較的長い期間をともに過ごすことは、私にとって初めての体験であった。なかなか英語が出てこず苦労することも度々あったが、伝えたい、仲良くなりたいという気持ちは常に持ちつづけるようにした。幸運にも良いメンバーに恵まれ、楽しく交流を深めることができた。

このプログラムを支えてくださった多くの先生方、TAの方、事務の方には感謝してもしきれない。このような貴重な機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

文責：渡邊春香



知床五湖にて

テーマ別レポート

瀬戸多加志、渡邊春香、河野奏人、中川大樹、八田紘和

1. 日の当たらない北海道の歴史

日本人は人生に何回日本史を学ぶだろうか。小中で最低2回、大学でも学べば5回も6回も、ということになるかもしれない。本州における（とは意識されていないかもしれないが）先史時代についてであればいずれの段階においても触れるから、誰しものが土器や古墳について多少の知識を有しているだろう。しかしながら、その知識はおそらく多くが暗記偏重のもので、詳しく背景や相違を考えてこなかったはずだ。北海道の歴史についてはどうだろうか。私は高校でも日本史を選択していたが、続縄文や擦文といった単語を目にしたのは日本史Bが初めてだったと記憶している。なぜ先史時代や北海道の歴史は軽く流されるのか。無論そこにはよく分かっていないから、という理由もあるだろうが、重要でないからという理由も多分に含まれているはずだ。

アイヌについては江戸時代の和人との関わりについてある程度学ぶが、それ以前の北海道の歴史は字面が文様や地域を表しているため、なんとなく何が言いたいのかは理解できるものの、やはり受験日本史という観点においては軽視されており、文化の名前として暗記しているに過ぎなかった。よって今回目にしたような遺跡が存在することは（無論東京大学の施設が存在することも）知らずにいた。常呂という地名自体もこのプログラムを知って初めて目にした。親に訊いてみたところカーリングの地として認識していたが、それ以上でも以下でもなかった。まあ何らかの時代の遺跡があるのだろうという程度に思って一切情報を得ずにやってきたが、近代北海道形成以前の全ての時代の遺構があると知り、大変衝撃を受けるとともに、知り得ることができたことに喜びを覚えた。一方で、上記のように情報がさほど提供されていないことを残念に思い、存在が広く認知されればよいのに、と感じた。

沖縄の人々は基地問題等に関し、「本土」の人間の意識格差を指摘するが、これは日本の教育がマジョリティーである本州等を中心として行われている結果だろう。歴史も同様の原理でヤマトからの流れを中心としているから辺境の歴史は二の次にされる。確かに、教育に与えられる時間は制約がある上、発達段階に応じて徐々に内容が深化していくのが勉強であるゆえ、致し方ないことかもしれない。しかしながら早い時期から教えないでいれば、日本の一部でありながら日本の歴史として認知されず、このような貴重な遺構も宝の持ち腐れとなってしまう。決定権をもつオトナが広範な知識を有することができていない限り現状は変わらないのだから、そういう世代を生み出さなくてはいけないと思わせてくれたのも収穫の一つといえる。

文責：河野奏人

2. 北海道の文化と熊の存在

アイヌの人々にとって熊は特別な存在だった。彼らにとって熊はその姿を借りて人間に肉を持って現れたカムイであり、それを崇め奉った。現在ではヒグマは恐怖と好奇心の対象として見られることとなり、人家に近づいたクマは駆除の対象にされ、山奥に生息しているクマは観光客による撮影の対象にされている。クマとの距離の取り方は時代の変化に伴って大きく変容してしまった。

狩猟によって食料を確保していたアイヌの人々にとって熊の肉は貴重な食料であり、熊が自分のもに現れたことを感謝し、再び姿を現すことを願って頭骨を飾ったり、熊送りと呼ばれる儀式を行ったりしていた。こうした熊に対する態度の痕跡は北海道の歴史の主流である縄文、続縄文時代の遺跡からは見られず、オホーツク文化の遺跡には見られることから熊の崇拜は大陸の北方民族由来のオホーツク文化からアイヌが引き継いだといわれている。このプログラムで尋ねたモヨロ貝塚のオホーツク文化の竪穴からも多くの熊の頭骨や熊を模した石像が出土しており、実際にそれを目にしたとき熊が当時の人々にとってどれだけ重要な存在であったか考え直さずにはいられなかった。竪穴式住居の最奥にいくつもの熊の頭骨が並べられている様子は荘厳で彼らにとって骨はカムイの化身で神棚のように祈りをささげる場所だったのであろうか。そう考えると家の中に小さな祭壇を置くというのは現代に通じるものがあるようにも思えた。また

特にモヨロ貝塚館の入り口付近に配置されている大きな熊の頭の石像は、それがどのように使われていたのか強く興味をひかれた。同様の形の小型の石像が出土するまで、その像は熊を模ったものだと認識されていなかったという。それほどまでに特異な大きさの石像は何らかの形で祭事に利用されたのだろうか、それほどの祭事とはどのようなものだったのか。自分には想像のつかないような形で熊を祀っていたのかと想像が膨らむ。

北海道に来る前からヒグマに対して興味は持っていたが、それはやはり人を襲うような野生の巨大グマを自分の目で見てみたいという興味からでしかなかった。僕にとってクマはクマという動物以上のものではなかったからだ。ただそれはこのプログラムで少し変わったように思う。当時熊はただの獲物としての動物ではなかった、熊という動物は神様が姿を変えたものだった。そのことを少し知ると古代の人々がどうして熊を神聖視したのか、熊に対してどのような気持ちで接したのか、熊に関する痕跡が出土していない縄文人は熊に対してどのように接していたのか、昔の人々と熊のかかわり方に興味が湧いた。

文責：中川大樹

3. ミュージアムの展示と主題

今回のプログラムでは東京と常呂・網走を中心として多くのミュージアムを訪れた。ここで「ミュージアム」と表記したのは、博物館のみならず美術館も訪れたためである。ミュージアムにはただ物が置いてあるだけではなく、展示の方法、展示物の取捨選択、スペースの活用など、個々のミュージアムの主題・目的に沿った判断に基づく展示が行われており、そこに各ミュージアムの個性が表れる。この観点から、いくつかのミュージアムを振り返り考察したいと思う。

江戸東京博物館は、名前の通り江戸と東京に焦点をあてたミュージアムである。江戸の街並みを再現したジオラマや歌舞伎座・日本橋のレプリカ展示など、来場者に対して昔の東京を紹介する、さらに言えば、体感させることが主眼であるように感じた。もちろん展示物の多くは本物であったが、落語調の音声ガイドの使用など、来場者が一般に持っている「江戸」のイメージをさらに拡張してより江戸を親しませるような構造になっている。ただ気になったのは、「江戸」から「東京」への移行が断裂していることである。「江戸」を感じ終えた来場者は、一度大きな広場に出て、再び「東京」側の展示へと移動する構造になっている。これは、江戸から東京への近代化という問題に対して「明確な断絶があった」という一つの観点を提示しているように思うが、個人的には「断絶」よりも「連続」という観点で展示をしてほしかった。

國學院大學博物館では、土器など考古学的な資料に加えて、神道に関する資料が多く展示されており、何よりも一大学があればの立派なミュージアムを保有していることに驚いた。神道に関して文献資料や現物を織り交ぜながら解説していたほか、考古資料に関しても、同時代の土器や槍を複数展示してイメージをわかりやすく提示していた。また一つの道具に関して国際的な比較展示を行っている点も非常に興味深かった。一方、仏教に関してそれほど展示がなかったことは驚きであった。神道と仏教は日本の歴史の中で相互に影響を及ぼしあってきた、いわば神道にとって欠かすことのできない相棒である。ミュージアムとしての主題はおそらく「神道と日本人」であり、その観点から見れば仏教は不純物かもしれないが、もしナショナリズム的な文脈でない「神道」を語りたいとするならば、もう少し仏教について触れても良いのではないだろうか。

最後に、北方民族博物館について述べる。アメリカ・シベリア・スカンディナヴィア・日本をはじめとした世界各地の北方民族について展示するこのミュージアムは、巨大で美しい建物を有している。さらに展示物に関しても、各民族の狩猟具・楽器・衣装など様々な物品を展示している。しかし、民族ごと、地域ごとの展示ではなく、道具別、テーマ別の展示であるため、どの展示物がどの地域由来のものなのかについては特別に注意を払って展示物ごとに示されたラベルを確認しなければならない。北方民族博物館が「北方民族」を展示する、つまり共通点を紹介するミュージアムであるならば、今のままで問題はないと思う。しかしながら、各民族間の相違点により注目できるような構造にしなければ、真に北方民族を展示しているとは言えないのではないかと。多くの民族を「北方民族」として一括りにしてしまえば、比較対象となるのは来場者の文明、すなわち現代の西洋近代化された日本文明である。「近代」の視点から「非近代」を捉えるというのは、来場者たちに無意識の偏見を植え付けてしまうように思う。「北方民族」と大きく捉えさせるのではなく、一つ一つの民族に意識を向けさせてこそ、初めて来場者が対等な視点を持って「北方民族」を理解することを

可能にするのではないかと思う。

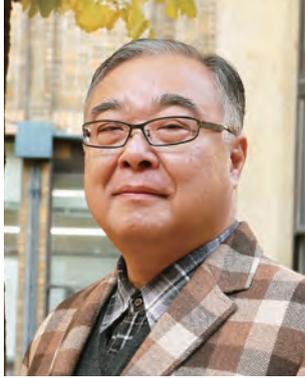
以上、3つのミュージアムに関して展示と主題というテーマで考察した。他にも大小様々なミュージアムを訪れたが、「このミュージアムは何を、どう、誰に紹介したいのか」という観点でミュージアムを見るということは、非常に興味深く、また貴重な経験であった。

私にとっては今回の夏期特別プログラムは、冬期特別プログラムに続いての2度目の文学部プログラムへの参加となった。冬期には、自らの英語力の不足やイギリスのミュージアム・展示物への理解不足を感じる事が恥ずかしながらしばしばあったが、今回は日本語で日本のミュージアムを見学したため、理解という点で躓くことはなかった。一方、あまりに慣れ親しんだミュージアムや風景を別の視点から捉えようとする試みは時に困難であった。そのような際、海外学生と言葉を交わし議論しあうことで、まったく違ったアイデアを得られたことも記しておく。プログラムを企画・運営して下さった先生方をはじめ、多くの関係者の皆様、年齢を気にせず接してくれた日本人学生、そして拙い英語を真剣に聞いてくれた海外学生に深く感謝を表して結びにかえたいと思う。ありがとうございました。

文責：八田紘和



知床五湖



(山上あかね撮影)

交流の夏

東京大学大学院人文社会系研究科・副研究科長

佐藤 宏之

今夏の文学部夏期特別プログラムが無事終了した。今回は、オーストラリア・イギリス・USA・メキシコから5名の学部生を迎え、東大の学部生(文学部・法学部・教養学部)5名とともに、9月9日から23日までの15日間、文字通り寝食をともにしながらのプログラムを体験してもらった。徐々にではあるが、海外から参加する学生の多様化が進んだことも喜ばしいことの一つである。夏期特別プログラムは4年目となり、運営もすっかり板についてきたが、一方でプログラムの内容に固定化の傾向が見え始めたのは、少し反省せねばならないかもしれない。

本プログラムは、主として考古学と文化資源学に関する学習を通して、さまざまな現地体験を共有しながら国際交流の実を体得してもらうことを主眼としている。今年も前半の東京の部では、東京の代表的な博物館(東京国立博物館・江戸東京博物館等)や主要大学の博物館(東大インターメディアテク・國學院大学博物館等)、美術館(東京国立近代美術館・国立新美術館・森美術館等)の施設や展示を見学し、1日日光に出かけた。希望者は、歌舞伎座にも赴いてもらった。日光見学は、海外からの受講生にはすこぶる評判がよい。根津・谷中・千駄木といった下町でのグループワークは、東大生と海外からの受講生が親密になるよい機会を提供している。

全期間を通じて、東大生と外国からの参加学生を区別せず、東京では上野のホテルで、後半の人文社会系研究科附属常呂実習施設では学生宿舎で同室してもらった。最初はどこかごちなかつた学生たちも、2週間にわたって同室する体験を通じて、次第にお互いを理解しあい、最後には人生観までも英語で語り合うことができるようになったようだ。座学・実習はもちろん、日常会話は全て英語が基本である。10名という受講生の数は、プログラムの効果を最大限に高めるのにほどよい規模と思っている。

後半の常呂では、道東という立地から、一転して朝晩は肌寒く感じるほどの冷涼な天候のもと、北海道の先住民が残した遺跡の体験発掘や付属の資料陳列館を利用した体験学習、地域の博物館活動に参画することを通じた社会連携の具体を知る機会を得た。講義や実習見学では、東大生もほとんど知らない北海道の独特の歴史を、実際の遺跡や遺物を前にして、文字通り体感しながら学ぶことができたはずである。常呂実習施設での朝晩の食事は、買い出しから食器洗いまで、日欧双方の学生ペアによる自炊であり、交流の実を上げる格好の機会となった。

本プログラムの実施は、2015年1月に英国セインズベリー日本藝術研究所と文学部との間で締結した部局間国際交流協定に基づいている。夏は東京と常呂に英国をはじめとする海外からの学生(5人)を招いてプログラムを実施し、冬は英国に東大の学部生5人を同期間(2月、15日間)派遣している。本プログラムは、文学部だけではなく、広く前期・後期課程の全学部に開放されているので、来冬も多数の参加希望者があるだろう。毎回少しずつではあるが、より内容の濃いプログラムに改善していきたいと思う。

末筆ながら、参加・担当・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に深謝いたします。

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1



セインズベリー日本藝術研究所

ノーフォーク州 ノリッチ



ロンドン ●

平成29年度
文学部夏期特別プログラム
(報告書)

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2017年12月1日

印刷 ヨシダ印刷株式会社

東大文  SAINSBURY INSTITUTE
for the Study of Japanese Arts and Cultures
セインズベリー日本藝術研究所

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>